

選択課題5 善を行うに勇なれ

次席

## 正しく生きるために

善を行うに勇なれ

よしだ あかり  
吉田朱里

(東京都立桜修館中等教育学校五(高等学校二年)

正しい行いをするとは

「善を行うに勇なれ」という言葉に、私は小学生の頃に伝記で読んだ杉原千畝のことを思い浮かべた。

日本人外交官の杉原千畝は、第二次世界大戦中の一九三九年にリトアニアの在カウナス日本領事館に領事代理として赴任した。当時、ヨーロッパではヒトラーを中心とするナチスが勢力を広げ、ユダヤ人への迫害が増大していた。一九四〇年七月のある日、ポーランドからナチスの手を逃れてきた何百人ものユダヤ人たちが、日本経由でアメリカやイスラエルに逃げようと、日本通過のビザを求め、日本領事館へ押し寄せた。

ユダヤ人がナチスから逃れる道は、シベリア―日本経由の脱出の道しか残されていなかったからだ。しかし、外務省から日本領事館に対する「発給要件を満たさぬ者へのビザの発給はならぬ」という訓令により、日本領事館でユダヤ人たちに日本通過のビザを発給することはできなかった。日本領事館領事代理として、外務省の訓令に従いビザの発給を拒むのか、それとも訓令に背きビザを発給しユダヤ人たちの命を救うのか。ユダヤ人のおかれた悲惨な状況を十分に理解していた杉原は、人道に拒否できないとしてビザの発給を決意した。それから杉原は、ソ連や本国からの領事館の退去命令を繰り返し受けながら、朝から晩までビザを書き続けた。領事館が閉鎖された後は

ホテルに移り、そこでも書き続け、最後は出国のために乗車した鉄道の車窓からビザの発給を続けたという。ビザの発給を始めから出国までの約一か月の間に杉原が発給したビザは、記録が残っているだけでも二一三九通に上り、六〇〇人以上のユダヤ人の命を救った。

日本領事館領事代理として外務省の訓令に従うのか、一人の人間として、人の命を救うことを正しい行いだと信じてビザを発給するのか、決断するには大変な勇気が必要だったことだろう。外交官でありながら外務省の訓令に背くことも、目の前に集まった何百人ものユダヤ人を見殺しにすることも、どちらも選びたくない道だ。杉原は良心に従い決断した。彼は、たいそうなことをしたわけではなく、当たり前のことをしただけと想っていたという。しかし、人として当たり前だが、誰もがいつでも当たり前前にできることではない。その当時、日本領事館がユダヤ人にビザを発給したとなれば命の危険があったのだから、その行いは相当の勇気のあることだった。苦悩の末に、自分が正しいと思う行いを選択した杉原の勇気が、六〇〇人以上もの多くの命を救うことになった。杉原のこの決断と

行いこそ「善を行うに勇なれ」だと言える。同じようにゲッターから一〇〇人もユダヤ人を救ったオスカー・シンドラヤー、杉原千畝より先にユダヤ人の命を救ったと言われる陸軍軍人の樋口季一郎がいる。彼らも、ナチスからユダヤ人の命を救うことが人として正しい行いであると信じ、勇気をもって行動することができた人たちだ。自分が正しいと信じた行いをする勇氣とは、なんと貴いことだろう。

## 【世間】と「世間」

正しい行いであることをわかっていながら、勇氣が足りずに行動に移すことができない。そのために、救えるはずの困った人を救うことができない。改善できるはずのことを改善できない。これは現代の私たちの社会のなかにも溢れている。

一つの例として、近年大きな問題にもなっている児童虐待に当てはめてみる。親からの暴力やネグレクトにより幼い子どもが命を落とす事件を報道で目にするが増えている。この命を救うことはできなかったのだろうか。毎日のように子どもの泣き叫ぶ声が聞こえてきたり、親の怒鳴り声が聞こえたとしたら、周囲の人は虐待の可能

性に気付くことができるのではないか。逆に、子どもがいるはずなのにその姿を全く見ることが無く、声を聞くことも無く、気配を感じることが無いことで虐待の可能性を察知することができたかもしれない。そんなとき、虐待に気付いた周囲の人、または虐待を疑う気持ちを持った周囲の人は、正しい行いをするのができたのだろうか。子どもの命を救うための行動を正しい行いとするならば、報道で見る限り正しい行いをするのができた人はあまり多くはないように見える。しかし、多くの人は子どもを助けたと思うのではないだろうか。子どもの命を気に留めなかったわけでもなく、通告することが面倒だったわけでもないはずだ。子どもを助けたと思ったときには、周囲の人は何を行うことが正しかったのか。私の住む大田区では、ホームページに、児童虐待を受けたと思われる子どもを見つけたときは、「区民の方からの連絡が子どもを虐待から守るための大きな一歩となります。連絡者や連絡者からの情報に関する秘密は厳守しますので、ためらわずにご連絡（通告）ください。」として、児童相談所の連絡先などもあわせて記載されている。また、児童福祉法第二五条および児

童虐待防止法第六条に、児童虐待を受けたと思われる児童を発見した者は、速やかに関連機関に通告する義務があるということが定められている。

異変を感じ、子どもの様子を見てみようとしてアをノックしようとしたとき、もしも何もなかった場合、親にも子どもにもとても失礼な行いとなってしまい、相手にとっても不快な思いをさせてしまう。自分もとても気まずい思いをすることになる。まずドアをノックするという行いには勇氣がいる。声をかけ、家庭内のことについて話を聞いてみることはさらに勇氣がいる。虐待の可能性を通告しようとしたときも同じだ。虐待がなかった場合、虐待を疑われた家族だけでなく、様子を見に来た児童相談所の職員や警察など多くの人に迷惑をかけてしまうことになる。自分が通告したことが知られると気まずい思いをする。これが行うべき正しい行動だとわかっていても、やはり通告するには勇氣がいる。

このように、困っている人を救いたいと思った時、周囲の人々がするべき正しい行いは、どれも簡単なことのようにみえても、周囲の人の評価や、世間の目が弊害となり、社会の中では勇氣のいる行動になってしまう

うということがたくさんある。しかし、その勇氣ある行いで困っている人を救うこと、虐待により命の危機に瀕している子どもを命を救うことができるかもしれない。現代社会においても、私たち一人一人が正しい行いを勇氣をもってすることはとても大切な。

### 『菊と刀』にみる日本人の二面性

なぜ、正しい行いをするときには勇氣がいるのだろうか。その行いが正しいとわかっているのに、当たり前に行うことができないのはなぜだろうか。その理由として、先に挙げたケースで見るとすれば、杉原千畝の場合には訓令や組織に背くことになってしまふからだ。児童虐待の場合には、自分の行いを周囲の人からどう思われるのが気になるから、などが考えられる。そして、そのどちらも、自分の行いで人に迷惑をかけたくない、周囲の人から迷惑な人だと思われたくない、自分の行いが周囲の人からどのような評価を受けるのか不安、もしも自分の考えていたことが間違っていたときに恥ずかしいなど、様々な思いが働いていることが見えてくる。私たち日本人は、真面目で、礼儀正しく、協調性が高い。その

ため、目上の人に従わないことや、人に迷惑をかけること、自分だけが周囲の人と違う行いをするを好まない。「空気を読む」「同調圧力」という言葉があるように、周囲に合わせ自分の意志とは異なる行いをすることや、暗に周囲と合わせることを求められることも少なくない。周囲と合わせることが安心であると思えることもある。このような日本人の特性が、命令や組織に従わず自らの意思で何かを行った場合や、周囲の人が誰もしていないことを行った場合に、人に迷惑をかけることになるのではないかと、周囲の人からどのように思われるのかという不安を持つことに繋がるのだ。そして、私たち日本人がそのような不安を感じながら、自分が正しいと思う行いをするときには勇氣がいることになるのだ。

アメリカの文化人類学者、ルース・ベネディクトは、著書『菊と刀』の中で、「日本人は、失敗すること、また、人から悪く言われたり拒絶されたりすることに對して傷つきやすい。そのため、えてして他人を責めるより自分自身を責めがちである。」また、「日本人は、拒絶されるのではないかと不安を外側にはなく、自分自身に向ける。そして、身動きがとれなくなる。」

と述べている。そして、その日本人の特性を、「日本人特有の倦怠感、あまりに傷つきやすい国民がかかる病氣」と表現している。倦怠感や病氣という表現が適切かはさておき、たしかに私たち日本人には、失敗すること自体を恐れたり、失敗したことで、人から悪く言われたり拒絶されることに對し傷つきやすい一面がある。失敗は、必ずしも拒絶されるものではない。失敗はどんなときも許されないというものではないことを私たちはわかっている。幼少期から、何かにチャレンジするときには「何度でも失敗したらいい」と励まされてきたし、「失敗は成功の母」という言葉もよく使われる。しかし、失敗のその先にある周囲からの評価が、私たちが不安な気持ちにさせることや、私たちが傷つけることがある。正しいと思う行いをするこへの不安、正しいことを行う勇氣が持てない自分への鬱屈した気持ち、ルース・ベネディクトは七〇年以上も前の日本人に見ていたのかもしれない。ベネディクトは、「周囲の人からどう思われるか」が、私たち日本人の行動原理のひとつとなっていることを指摘している。当時も現在も、外国人から見た日本人は、世間の目や周囲の評価を気にし

すぎるあまり、とても窮屈に生きているように見えるだろう。

また、彼女は「日本の識者が敗戦の日以降語っていることを敷衍する」として「日本は、国民が、自分自身の生き方を選び、自分自身の良心に頼るよう奨励しなければならぬ」と、加えて、「識者が日本における恥の役割を疑問視し、国民が批判にさらされ」世間「からのけ者にされる不安から解放されることに期待を寄せる」と述べている。私たちが、世間の目や周囲の人の評価から解放され、自分の良心に従い、自分の正しいと信じた行いをする事だ。これは、終戦から七五年経った今日でも、私たち日本人の課題の一つであると言える。私たちは正しい行いをする勇氣を持たなければならぬ。

日本の文化を「菊と刀」とするなら、解

釈は様々だろうが、菊は、窮屈な環境で繊細な手入れを施された菊の花のように、自由を自制しながら美しく生きようとする日本人の生き方。刀は、錆に侵されやすい刃を錆び付かせないよう腐心する習性、すべきことを全うしようとする日本人の強い精神のこと。とすると、それはどちらとも日本人の姿に当てはまる。真面目さや礼儀正しき、協調性、自制心などを大切にしながら

ら生きること、傷つきやすい心を持ちながら、強い精神を保ち、磨き続けること、そして臆病さと勇敢さ、私たち日本人は、この両面を持ち合わせているのだ。だとすれば、私たち日本人は、世間の目や周囲の評価に臆病でありながら、正しい行いをする勇敢さも持っているはずなのだ。

### 武士道——日本人が考える日本の精神

外国人から見た日本文化が「菊と刀」ならば、日本人が考える、日本の社会における道徳観や思想、日本人の伝統的な精神を表現するのが、「武士道」だ。武士道とは、かつての武士の階級社会における道徳観や思想に限ったものではない。武士の時代から現代まで、また、武士から庶民まで、長く広く私たち日本人に受け継がれてきた、日本人の精神の柱と言われる。

新渡戸稲造が『武士道』を著したのは、ドイツ留学中にベルギーの法学者から「宗教教育のない日本で、どのようにして道徳教育を授けるのか」と問われ、即答できなかったことから始まる。たしかに、私たち日本人には宗教教育というものがない。さらに言えば、道徳教育にも明確な形はないのかもしれない。私たちは、生きていく中

で、幼少期から「人としてこうあるべき」という姿を、あらゆる場面で繰り返し教えられ、道徳観を身に付けていく。これらの日本人に受け継がれる道徳観や、精神、すなわち武士道について書かれた新渡戸の本は、日本の道徳教育や日本人の道徳観を、広く世界に知らしめ、日本人の精神に対する世界の評価を獲得した。そして、現代の私たち日本人にも、改めて日本人の精神の柱である武士道を示してくれる。

武士道の「義」とは、道理を通し自分で決断する心であり、人間が進むべき真っ直ぐな道のこと、つまり、人としての正しい道、そしてそれを決断する心、正義のことだ。『武士道』の中で、「義」について、真木和泉の「節義は例えていわば人の体に骨あるごとし。骨なければ首も正しく上にあることを得ず、手も動くを得ず、足も立つを得ず。されば人は才能ありとも、学問ありとも、節義なければ世に立つことを得ず。節義あれば、不骨不調法にても、士たるだけのこと欠かぬなり」を挙げ、「義」が日本人の骨であり、骨がなければ首も正しくつかず、手足も動かない。どんな才能や学問があっても「義」がなければ武士にはなれない、「義」さえあれば他は大した

問題ではないことを記している。それは、人として正しい決断をすること、自分が正しいと信じる道を進むことができるのが武士であるということ、その心をもつことが武士道の一つだと示している。

武士道の「勇」とは、正義を貫く勇氣、正しい行いをする行動力のことだ。『武士道』では、孔子の『論語』における勇の定義「義を見てせざるは勇無きなり」を挙げ、正しいことを知りながら行わないことは勇氣がないこと、すなわち「勇」とは、正しい行いをする勇氣であることを記している。

新渡戸稲造は、武士道の「義」と「勇」は、双生児だと言っている。人として正しいと思う行いを選択すること、その正しい行いをする勇氣だ。日本人の心には、正しい決断をし、正しい行いをする勇氣を教えとする武士道がある。「善を行うに勇なれ」は、私たち日本人にはるか昔から受け継がれてきた教えであり、行動理念として私たちの精神の柱となっていたのだ。

### 善を行うに勇なれ

正しい行いをする、善を行うことは、勇氣のいることが多くある。その上、

勇氣をもってした行いが、思ったような結果とならないことや、周囲の人から受け入れられないこと、悪い評価を受けることもある。それによって傷つくこともあるかもしれない。さらに、そのような周囲の人の評価は、現代の社会では、SNSなどネット上での誹謗中傷に繋がることもある。

ネット上の誹謗中傷も、現代社会の大きな問題の一つとなっている。たった一人の、心無いたった一言が、ネット上で拡散されることで社会全体からの声であるかのように変化してしまう。炎上と言うと一過性の現象のように思わせるかもしれないが、誹謗中傷を受けた人間にとっては、社会全体から攻撃されたかのような感覚になる。実際にそのように感じ苦しむ人は多く、社会生活を送ることができなくなる人や、命を落とす人もいる。周囲の人の評価や世間の目に臆することなく、自分が正しいと思う行いをするのは、今後ますます勇氣のいることになっていくのかもしれない。それでも私たちは、勇氣をもって正しい行いをするべきだ。勇氣をもってした私たちの正しい行い、すなわち善を行うことは、きっと誰かを救うことになるからだ。その誰かは、身近な一人かもしれないし、見知らぬ

大勢の人かもしれないし、自分自身かもしれない。正しい行いが、誰かの何かの役に立つことができるのだ。

世間の目や周囲の人の評価に臆することなく、自分が正しいと思うことを信じて正しいと思う行いをするのは、必ず自分の自信となり、自分を支えていくだろう。シンプルにそれが正しい行いで、善い行いだからだ。その正しい行いをする勇氣のある自分自身が、自分の根幹の揺るぎない柱となり、その先の自分を支えてくれるのだ。正しいことを分かっているのに、勇氣をもてずにももできない自分はどうか。自分の良心をごまかし、困っている人を見捨てたかのような自分は、自分自身を失望させ、きっと後悔することになるだろう。

私の母は、店や電車の中で気にかかる人がいればすぐに声をかける、勇氣もいらすいとも簡単そうに。知らない人に声をかけることより、自分に何かできるかもしれないのに声をかけないの方が恥ずかしいことだと言う。自分が正しいと思うことを行うにはときに勇氣がいるが、正しいと思うことを信じて行うことを繰り返すうちに、勇氣がいることだったことも、躊躇なく行うことができるようになるのではない

か。正しい行いは、高いハードルかもしれない。一人の力では越えられないハードルもときにはあるだろう。それでも、やってみよう。正しい行いをする勇氣をもつこと、正しいことを正しいと判断できる心をもつこと、正しい道を通り直ぐに進む勇氣を持つこと。「善を行うに勇なれ。」

・新渡戸稲造著（矢内原忠雄訳）『武士道』、岩波書店、一九九一年  
・新渡戸稲造著（齋藤孝訳・責任編集）『武士道——日本精神の「華」は、いかに鍛えられたか』、イースト・プレス、二〇一〇年

〈参考文献〉

・ヒレル・レビン著（諏訪澄／篠輝久監修・訳）『千畝——一人の命を救った外交官 杉原千畝の謎』、清水書院、一九九八年

・杉原幸子著『六千人の命のビザ——ひとりの日本人外交官がユダヤ人を救った』、朝日ソノラマ、一九九〇年

・大田区ホームページ「児童虐待について」  
[https://www.city.ota.tokyo.jp/faq/bunya/kosodate/jidou\\_gyakutai.html](https://www.city.ota.tokyo.jp/faq/bunya/kosodate/jidou_gyakutai.html)

・ルース・ベネディクト著（角田安正訳）『菊と刀』、光文社、二〇〇八年（本文中の引用は二六一ページ～二六二ページ、四九五ページ）

・ルース・ベネディクト著（長谷川松治訳）『菊と刀——日本文化の型』、講談社、二〇〇五年